臨床実習のアンケート調査の結果報告

田辺 達磨，田村 哲也，大澤 裕行，松本 揚
了徳寺大学・健康科学部整復医療･トレーナー学科

要旨

【はじめに】本学科の臨床実習の目的は，これまでに学習した基礎医学，基礎柔道整復学および臨床柔道整復学の知識を統合，整理して正確な病態把握と的確な治療を選択できる能力を獲得することである．今回4年次前期に行なった臨床実習Ⅱ終了後にアンケート調査を実施し，臨床実習を通して感じたことや知識,技術,考え方についての検証を行なった.

【対象･方法】2015年度前期の臨床実習に参加した本学科の4年生（74名）を対象とし，実習終了後にアンケート調査を行い，集計した.

【結果･考察】満足度においては8割近くが満足という回答を示した．スタッフとの良好な関係を築いたことが，臨床実習の充実度に影響しているのではないかと示唆される．しかし実習での知識不足，また将来柔道整復師になることに不安を感じる学生が多くみられた．今後は学内での知識習得とともに，柔道整復師の魅力を認識してもらえるような体制を確立していくことが重要と考える.

キーワード：臨床実習，アンケート調査

Report of a Result of Questionary Survey of the Clinical Training

Tatsuma Tanabe, Tamura Tetsuya, Hiroyuki Osawa, Yo Matsumoto
Department of Judotherapy and Sports Medicine, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University

Abstract

Ⅰ. Introduction The purpose of the clinical training in this department is to internalize the knowledge of experimental medicine that students have learned so far, namely basic reposition by Judo studies and clinical reposition by Judo studies, and to acquire the ability by which they arrange the knowledge and can choose correct clinical condition and precise treatment. We conducted a questionnaire after Clinical Training II for fourth year students, which was conducted in the first half of the first term. We examined students' knowledge, technique and their way of thinking during the clinical training.

Ⅱ. Subject, method Subjects were 74 fourth graders who participated in the clinical training in the first term of 2015, and was conducted after the training.

Ⅲ. Results, discussion Around 80% of the subjects answered the training was comprehensive. The subjects were able to build a good relationship with the staff on site may enable them to find fulfillment in the training. However, many subjects felt anxious about their lack of knowledge and their becoming a Judo therapist in the future. It is important to enable students in acquiring knowledge and establish a system for

students to recognize charm of Judo therapy.
Keywords：clinical training，questionnaire survey

背景

現在，様々な臨床実習におけるアンケート調査などの研究報告がなされている．看護師や理学療法士，作業療法士養成教育における臨床実習においては，数多くの論文報告されており，重要性も論じられている． しかし，柔道整復師養成教育における臨床実習についての報告はほとんどなされていない．

臨床実習は教育を受ける学生が主体となるべきものである．しかし，これまで臨床実習に関する問題の多くは，学生の意見が不在のままであり，臨床実習を行っただけで終了してしまっていることが多い．そのため，学生の臨床実習に対する意識，臨床実習指導者との関係など，十分に把握できていないのが現状である．また，臨床実習において，実習指導者を見て学ぶことから，臨床で働く柔道整復師の学生対応や学生の関心を高める行動，憧れを持たせるように努める必要性もある．

そこで今回は，臨床実習を終了した本大学4 年生を対象にアンケート調査を実施し，臨床実習に対する学生の意識，積極性，臨床実習指導者との関係性を調査し，今後の臨床実習教育のあり方について考察したので報告する．

方法

2015年5月12日から6月5日までに整形外科クリニックにて臨床実習を行った学生74名（男性45名，女性29名）を対象とし，アンケート調査を実施した．アンケート用紙（図１）の内容は，臨床実習の満足度，実習期間について，実習を終え，来年度から柔道整復師として従事することが不安か，積極的な態度で実習を行えたか，実習担当者や他のスタッフとの良好な関係を構築できたか，臨床の実際を学ぶことができ，イメージと合っていたか，患者に対する接し方は適切であったか，実習を行う際の知識は十分であったか，柔道整復師の国家試験に受かりたいと思ったか，以上，9項目を4段階で選択してもらい，他に自由記述，将来就きたい職業についての調査も行った．

この調査は，本調査の趣旨，アンケートの協力は自由意志であること，また， その諾否は成績評価に影響しないこと，プライバシーは保護され目的外使用はしないことを口頭で説明し，アンケート用紙の提出を持って同意を得たとすることを伝えた．

集計したアンケートの内容データは了徳寺大学，整復医療トレーナー学科助手室内で管理を行った．

結果

臨床実習を行った本学4年生74名，すべてのアンケートを回収することができ，回収率は100％であった．アンケート調査の内容は以下の通りである．

実習の満足度	満足
	やや満足
	やや不満
	不満
実習期間について	丁度良い
	やや短い
	短すぎる
	長すぎる
実習を終え、来年度自身が柔道整復師として従事することに対し不安を感じるか	かなり感じる
	少し感じる
	感じない
	何とかなる
積極的な態度で向上心を持って実習を行えたか	積極的
	やや積極的
	やや消極的
	消極的
実習担当者や他のスタッフと良好な関係を構築できたか	良好
	やや良好
	やや不足
	不足
臨床の実際を学ぶことができ、自分のイメージと合っていたか	とてもそう思う
	大体そう思う
	少しそう思う
	ちっとも思わない
患者様に対する接し方(話し方や態度)は適切であったか	適切
	やや不適切
	不適切
実習を行う際の知識は十分であったか	十分
	やや不十分
	不十分
不足していた知識分野	
柔道整復師の国家試験に絶対に受かりたいと思ったか	思った
	少しは思った
	あまり思わなかった
	思わなかった

将来やりたい職業は何ですか.

実習前

柔道整復師　AT　CSCS　教職　健康運動指導士　その他　（　　）

実習後

柔道整復師　AT　CSCS　教職　健康運動指導士　その他　（　　）

図1. アンケート用紙

Ⅰ．実習の満足度

回答率は100％であった．満足度14％，やや満足62％，やや不満23％，不満1％という結果になった．このアンケート結果から8割近くの学生が実習に満足感を得たことが分かる．

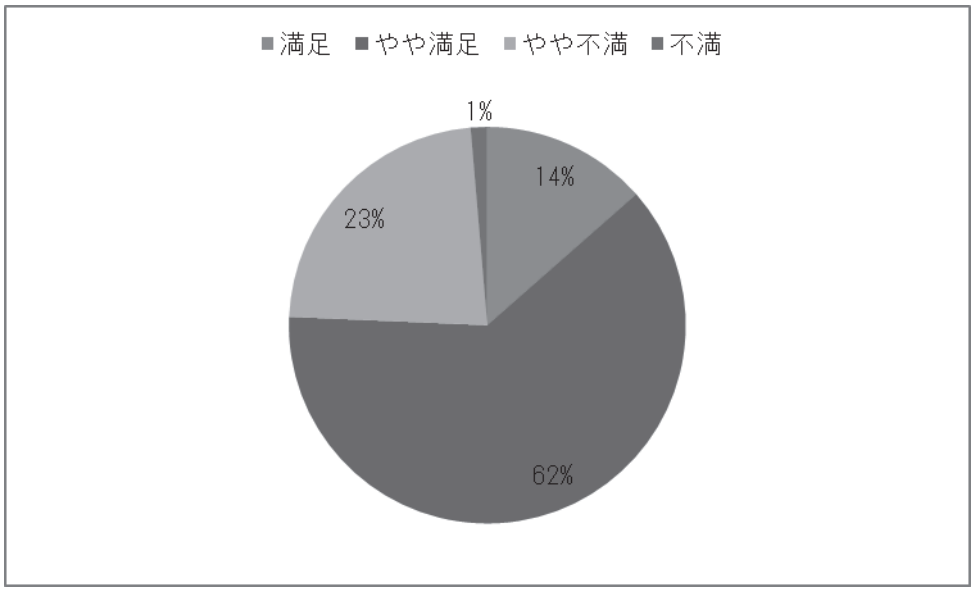

図2．実習の満足度

Ⅱ．実習期間について

回答率は100％であった．丁度いいが55％，やや短いが10％，短すぎるが12％，長すぎるが3％という結果になった．実習期間については半数以上の学生が実習期間に対してちょうど良いと回答した．

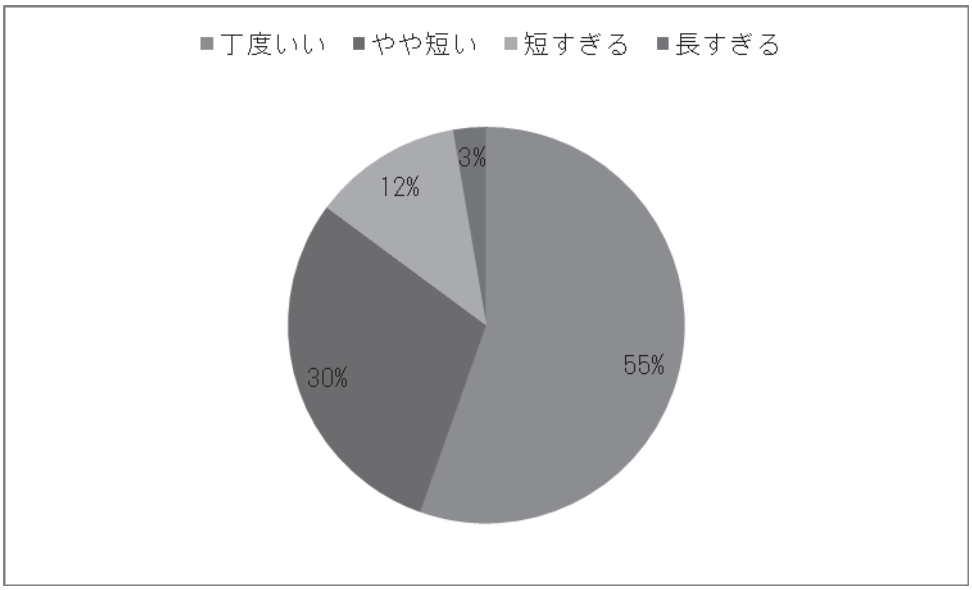

図3．実習期間について

Ⅲ．柔道整復師として従事することに対し，不安を感じるか

回答率は100％であった．かなり感じる46％，少し感じる43％，感じない7％，なんとかなる4％という結果になった．実習を終え，柔道整復師になることに対して不安になっている学生が9割を占めていることがわかる．

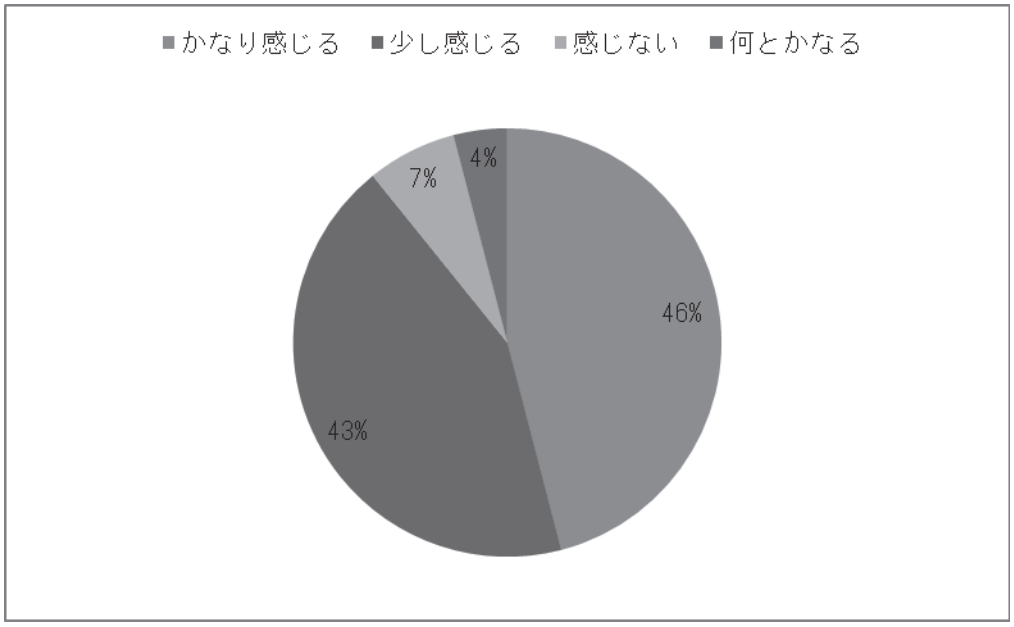

図4．実習を終え，来年度自身が柔道整復師として従事することに対して不安を感じるか．

Ⅳ．積極的な態度で向上心を持って実習を行えたか

回答率は100％であった．積極的36％，やや積極的47％，やや消極的17％，消極的0％という結果になった．　8割以上の学生が積極的に実習を行っていたことがわかる．

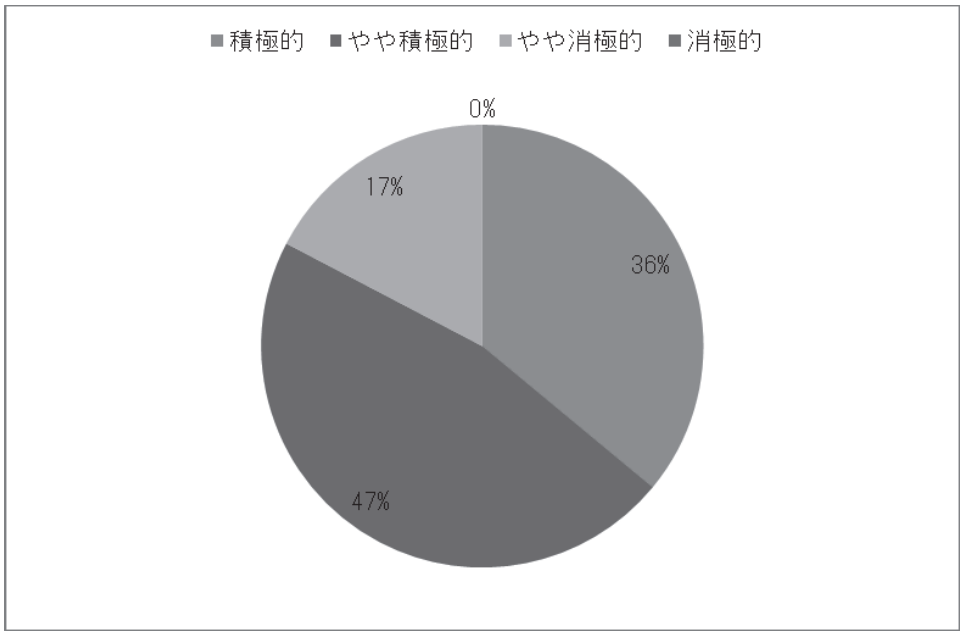

図5．積極的な態度で向上心を持って実習を行えたか

Ⅴ．実習担当者や他のスタッフとの良好な関係を築けたか.

回答率は100％であった．良好31％，やや良好50％，やや不足8％，不足4％という結果になった．8割以上がスタッフとの良好な関係を保ちながら実習を行えたことがわかる.

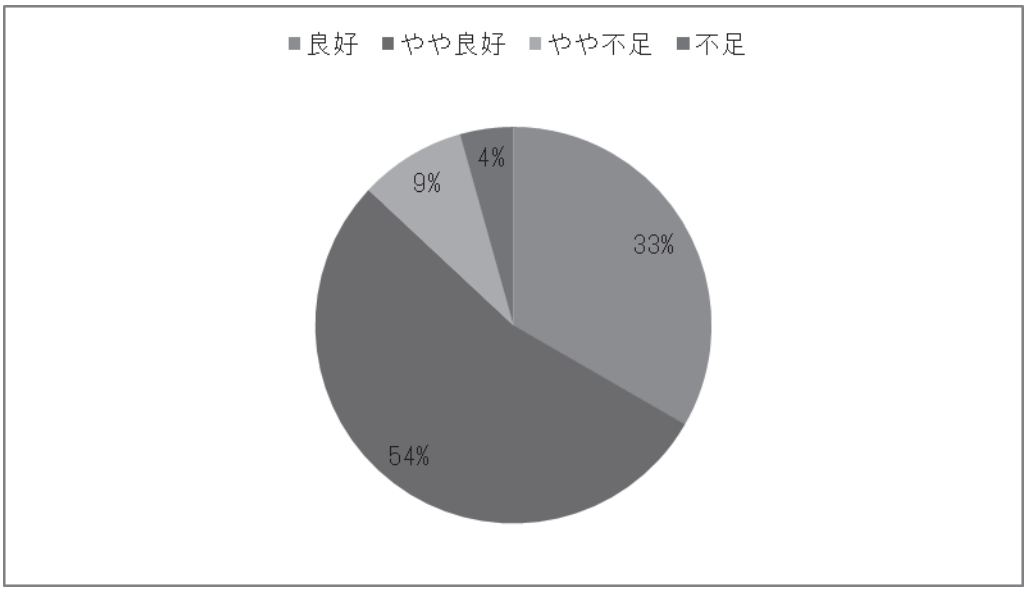

図6．実習担当者や他のスタッフと良好な関係を築けたか

Ⅵ．臨床の実際を学ぶことができ，自分のイメージと合っていたか

回答率は100％であった．とてもそう思う14％，大体そう思う53％，少しそう思う27％，思わない6％という結果になった.

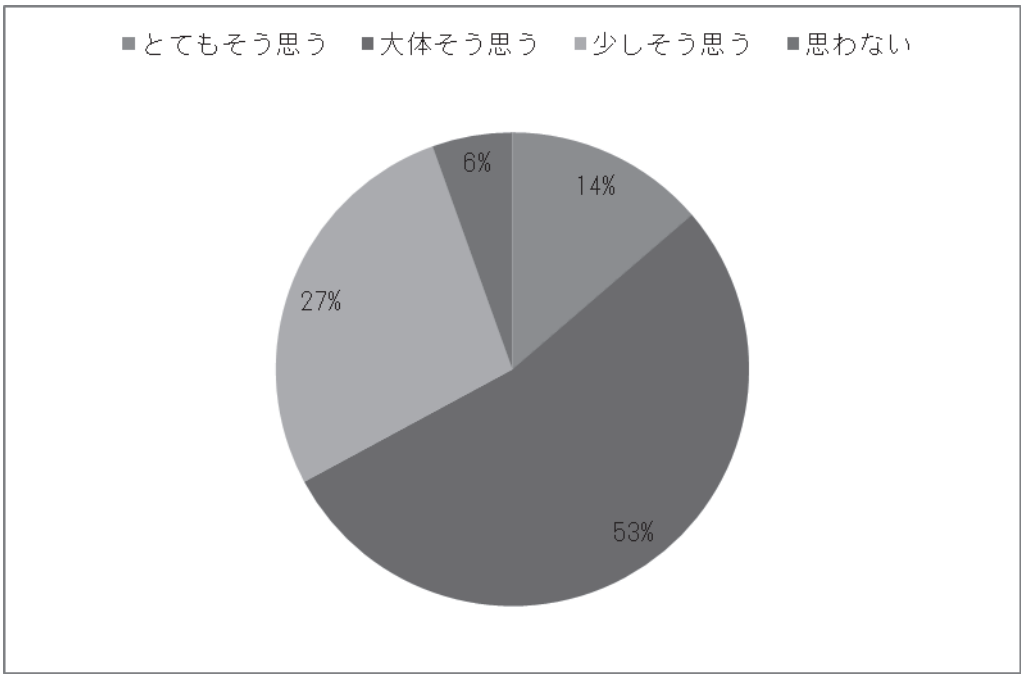

図7．臨床の実際を学ぶことができ，自分のイメージと合っていたか.

Ⅶ. 患者に対する接し方は適切であったか

回答率は100％であった．適切79％，やや不適切21％，不適切0％という結果になった．

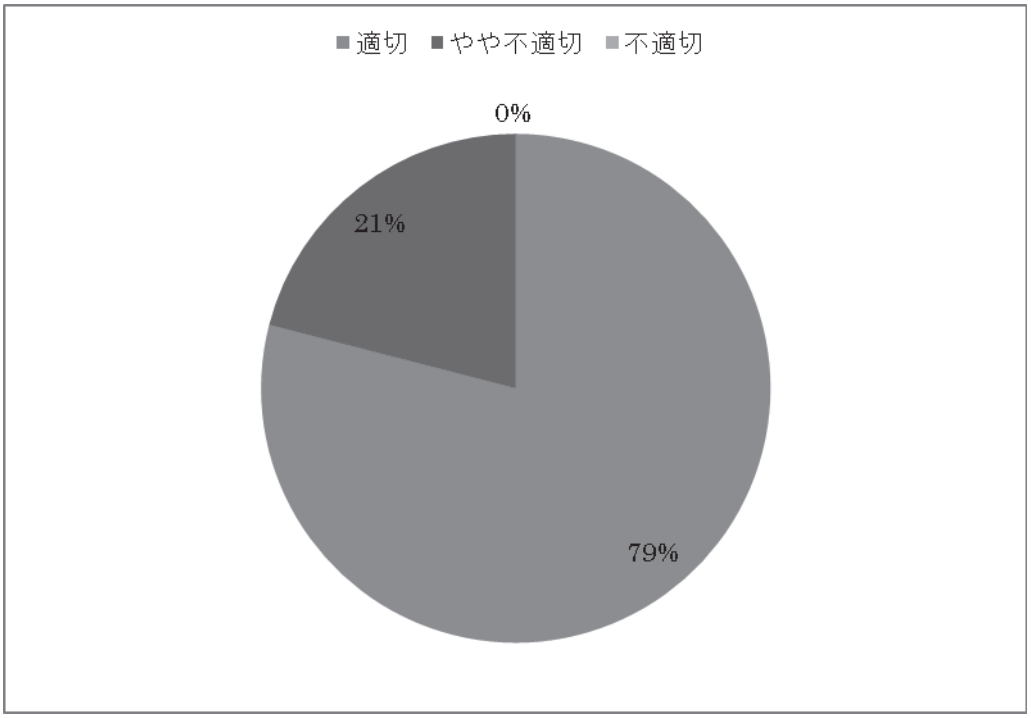

図8．患者様に対する接し方（話し方や態度）は適切であったか．

Ⅷ. 実習を行う際の知識は十分であったか

回答率は100％であった．十分8％，やや不十分41％，不十分51％という結果になった．

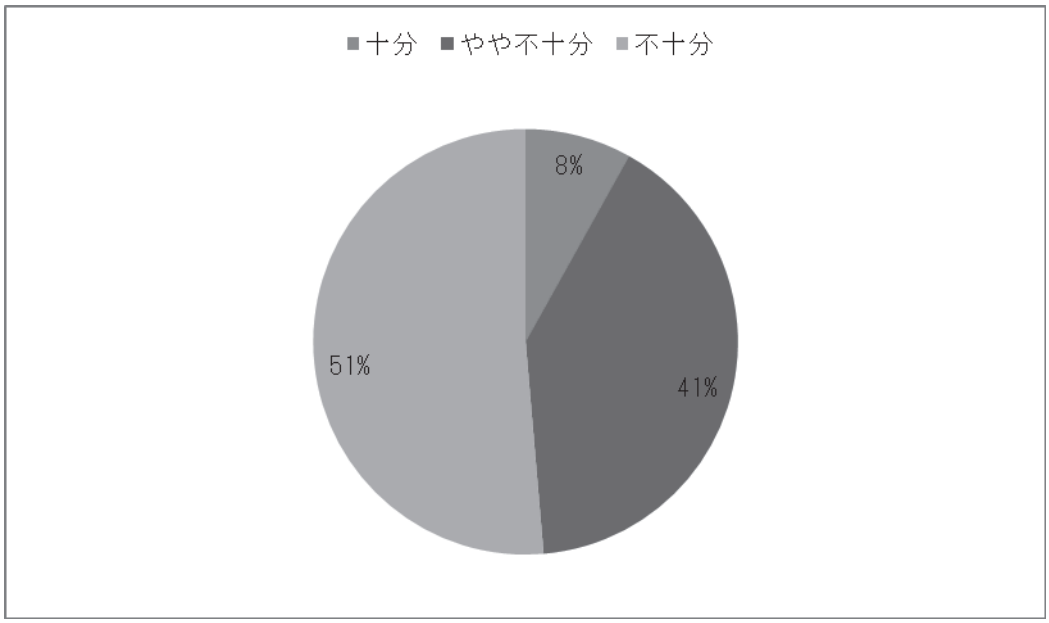

図9．実習を行う際の知識は十分であったか

Ⅸ．柔道整復師の国家試験に絶対に受かりたいと思ったか

回答率は94％であり，9項目のうち，この項目のみ100％でなかった．思った89％，少し思った4％，あまり思わなかった1％，思わなかった0％，無回答6％という結果になった．

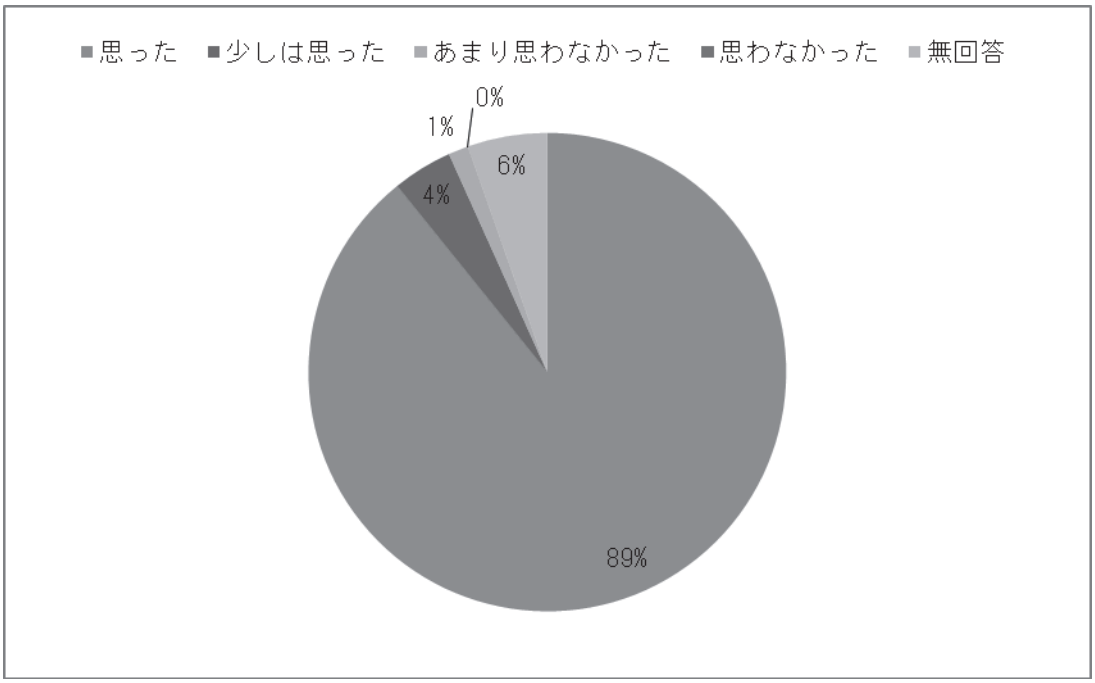

図10．柔道整復師の国家試験に絶対に受かりたいと思ったか

アンケート項目の「不足していた知識分野について」は,集計を行った結果，回答の統一性がないため除外した．

考察

実習生の満足度について，約8割の学生が臨床実習に満足していると回答している．また，実習先でのスタッフとの関係や，実習担当者との関係との良好な関係を築けた学生が多かった．自由記載にも「先生がよく面倒を見てくれた」などの意見があり，臨床実習の充実度に影響していると考えられる．

実習期間については，丁度良いが55％，その他，短い42％，長い3％となり，意見が割れる結果となった． 本学では柔道整復師の他にも様々な資格取得を目指すことができるカリキュラムになっている．アスレティック・トレーナーや健康運動指導士，CSCS，第一種中学・高等学校保健体育教員免許が取得可能になっている．将来就きたい職業について調査した際も柔道整復師と答えた学生は少数であった．アスレティック・トレーナーの実習日数は1学年から4学年まで長期にわたり，他の資格についても同様である．このような因子が，実習期間について意見が割れた要因であると示唆する．

柔道整復師になるということが不安かという質問に対しても，ほとんどの学生が不安という回答を示している．実習が1．5日という日程の中，臨床の実際を全て見ることができなかった可能性が上げられる．そのため，臨床現場の緊張感や教科書上とは違う治療方法などが学生を困惑させた可能性がある．また実習担当者などから質問をされ，受け答えすることが出来なかったという学生も多く見受けられた．実習を

行う際の知識が不十分であったと答えた学生が9割と多く，知識不足，臨床現場での治療法など学生が普段学ばないことが多数あり，将来の不安を感じる学生が多く見受けられたのではないかと考える．また将来なりたい職業でも柔道整復師と回答した学生が少なかった理由もこのような因子が関係していると考えられる．

患者対応については，適切であると答えている学生が多く，実習生の模範となるスタッフが多くいたと考えられる．臨床のイメージと合っていたという項目でも9割近くの学生が合っていたと回答している．このことからスタッフや実習担当者の影響力は強いのではないかと考えられる．本学の臨床実習はこれまでに学習した基礎医学，基礎柔道整復学および臨床柔道整復学の知識を統合，整理して正確な病態把握と的確な治療を選択できる能力を獲得することである．また，臨床現場において直接患者と接することでコミュニケーション能力の必要性を認識する実習でもある．臨床実習の満足度やイメージが実習担当者によって大きく左右されることはしばしば指摘されている．本調査からも，学生は意欲的に臨床実習に取り組む姿勢があることが見受けられ，それを短い実習期間でどのように導いていくかにおいて，スタッフや実習担当者の指導にかけられる期待は大きく，今後の学生進路に最も関係している2つの因子ではないかと考える．

国家試験に絶対受かりたいと思ったかという項目については，ほとんどの学生が受かりたいと回答している．学生自身，自由記載にて「自分の考えの甘さがわかった」「勉強不足であった」など実習にて国家試験への意識づけがなされたのではないかと示唆される．

最後に「知識，技術，考え方」の検証について，知識に関しては不足していたという回答が多く，今後の臨床現場と教育現場の課題になるであろうと示唆される．考え方に関しては，臨床の実際を学ぶことができ，自分のイメージと合っていたかという項目については，半数以上が学ぶことができ，イメージと合っていたと回答している．しかし学生自身，自由記載にて「自分の考えが甘かった」「このままでは現場に出れない」などで自分自身の臨床現場での考え方の不足さが示唆された．また国家試験に絶対受かりたいと思ったかという項目でもほとんどの学生に関して受かりたいと答えており，自由記載にて「すぐに現場で活躍できるようになりたい」など学生自身の知識，考え方の不足を臨床実習で再確認できたのではないかと示唆される．技術に関しては，今回は見学実習が主であり，アンケート調査では十分に検証することができなかった．

今後の研究課題

今回のアンケート調査は臨床実習終了後に行ったものである．またサンプルサイズが74名と少なかった．今後の研究の課題として，臨床実習前にもアンケート調査を行い，実習前後の学生の意識の変化などを比較することやサンプルサイズを増やすため，4年次だけでなく，3年次の臨床実習においても同様の調査を行い，比較検討していくことが必要であると考える．

まとめ

満足度においては8割近くが満足という回答を示した．スタッフとの良好な関係を築いたことが，臨床実習の充実度に影響しているのではないかと示唆される．しかし実習での知識不足，また将来柔道整復師になることに不安を感じる学生が多くみられた．今後は学内での知識習得とともに，柔道整復師の魅力を認識してもらえるような臨床実習になるための体制を確立していくことが重要と考える．

参考文献

1）X リック ヴィール，ミカエル・シーゲルほか（1972）日本の臨床教育．理学作業療法第6，11-17.

2）福屋靖子（1978）臨床実習のあり方・総論，理学作業療法12,17-23.

3）菊地延子（1985）実習指導者の立場より．理学療法学第12,353-359.

4）坂本年将（1991）臨床実習に対して学生が蝦むこと．理学療法学．18,109-113.

5）千葉 梢ほか（2012）学生はどのように臨床実習に取り組んだか? - OT学生のアンケート調査の結果より，健康科学大学紀要．8,121-128.

6）牧内 くみ子（2011）柔道整復師養成学校の臨床実習について，学生の視点に立った臨床実習のあり方検討，社会医療研究．9,25-29.

7）坂本 年将（1992）臨床実習に対する学生の意識 - 医療技術短期大学部3 年生に対するアンケート調査- 理学療法学．19 ,445-451.

（平成27年11月30日稿）

査読終了日　平成28年1月8日